

石田王を悼む挽歌

柿本人麻呂作歌注釈 4

森 朝 男

同石田王卒之時山前王哀傷作歌一首

角障経 石村之道乎 朝不離 将婦人乃 念乍 通計万口波 霍

公鳥 鳴五月者 菖蒲 花橋乎 玉尔貫 一云貫交 纏尔将為登

九月能 四具礼能時者 黄葉乎 折挿頭跡 延葛乃 弥遠永 一云

田葛根乃弥遠長尔 万世尔 不絶等念而 一云大舟之念憑而 将通 君乎

婆明日従 一云君乎従明日者 外尔可聞見牟

右一首或云柿本朝臣人麻呂作

或本反歌二首

隱口乃 泊瀬越女我 手二纏在 玉者乱而 有不言八方

河風 寒長谷乎 歎乍 公之阿流久尔 似人母逢耶

右二首者或云紀皇女薨後山前王代石田王作之也

同じき石田王の卒りにし時に、山前王の哀傷して作る歌一首

つのさはふ 磐余の道を 朝去らず 行きけむ人の 思ひつつ

通ひけまくは ほととぎす 鳴く五月には 菖蒲草 花橋を 玉

に貫き（一に云ふ 貫き交へ） かつらにせむと 九月の 時雨の

時は 黄葉を 折りかざさむと 延ぶ葛の いや遠長く（一に云ふ

葛の根のいや遠長に） 万世に 絶えじと思ひて（一に云ふ 大

船の思ひ頼みて） 通ひけむ 君をば明日ゆ（一に云ふ 君を明日

ゆは） 外にかも見む

右の一首は、或は云はく、柿本朝臣人麻呂の作なりと

或本の反歌二首

隱口の泊瀬娘子が手に纏ける玉は乱れてありと言はずやも

河風の寒き泊瀬を歎きつつ君が歩くに似る人も逢へや

右の二首は或いは云はく、紀皇女の薨せし後に山前王の石田王に代りて作ると。

同じ石田王 これに先立つ長・反歌の題詞に「石田王の卒りにし時に、丹生王の作る歌一首并に短歌」(四二〇〜四二二)とあるのを受ける。石田王は伝未詳。諸注多くイハタノオホキミと訓む。或本の反歌の左注に見える紀皇女は妻か。

山前王 続日本紀天平宝字五年(七六二)三月、葦原王の流刑記事に「葦原王者、三品忍壁親王之孫、従四位下山前王之男」と見える。天武天皇の皇子忍壁皇子の子。慶雲二年(七〇五)十二月、无位より従四位下。養老七年(七三三)十二月二十日、散位従四位下にて卒。懐風藻に「五言侍宴一首」(懐風藻四一)が見える。訓みにヤマクマ・ヤマサキの二説があるが、注釈(澤瀉久孝)に集中の歌句にヤマクマなく、「夜麻乃佐吉」(14・三三九四)、「乎可乃佐伎」(20・四四〇八)などあるのによつて、ヤマサキと訓むのが穩当ではないかといつてゐる。それに従う。人麻呂は忍壁皇子と縁が深く、その義兄かと思われる河島皇子の死に際し、忍壁皇子とその姉の泊瀬部皇女(河島妃)に挽歌を献じてゐる(2・一九四〜一九五)。また巻九の柿本人麻呂歌集歌にも忍壁皇子への献歌が見える(9・一六八二)。この長歌は忍壁皇子との縁によつて、その男山前王が詠むべき歌を人麻呂が代作したものであるとも見られる。但し後文にも説くとおり、夫婦関係を基礎に詠まれる人麻呂挽歌は、夫の期待を裏切つて妻が死に、残つた夫が嘆く、という形式が多く、

この歌も本来は妻の死を詠む挽歌であつたものを、夫の死を詠む者に改作したものである可能性がある。とすれば、人麻呂作の本歌があり、それを山前王ないしその周辺の者が、状況に依じてこのように改作したと考えることができる。

つのはふ 仁徳紀歌謡に「つのはふ磐の媛が」、集中に「つのはふ石見の海の」(2・二三五)など見える。「つのはふ」は蔓の意。蔓がたくさん延う意で、磐にかかるかという(荒木田久老・日本紀歌解楓落葉)。

磐余の道 奈良県桜井市の西部。香具山の東北。藤原宮から泊瀬方面へ、さらにはそれを越えて伊勢方面へ行く道であつたらしく、春日老の歌に「つのはふ磐余も過ぎず泊瀬山いつかも越えむ夜は更けにつつ」(3・二八二)と見える。この地にかかる古代の宮殿として磐余稚桜宮・磐余瓊栗宮・磐余玉穗宮などがあり、神武天皇も神日本磐余彦といつた。古い地名で、歌にも詠まれやすいもの(歌枕的)だつたのだろうか。集中の五例のうち四例は道行きとして詠まれる。万葉集では道として詠まれる意識が強い。

朝去らず行きけむ人「朝去らず」は朝を一つも落さずに。朝毎に。毎朝。「行きけむ」は注釈(澤瀉久孝)に、藤原宮への出仕とする代匠記説、泊瀬への妻問いとする攷証の一説(出仕説を挙げ、または、として挙げる)を並記した後、原文の「帰」の字に注目して女

の許からの帰路をいうかとする。近年の全注(西宮一民)、釈注(伊藤博)もこれに近い。全訳注原文付(中西進)は出仕説。次の「思ひつつ通ひけまく」と対応するもので、「行きけむ」と「通ひけまく」は反対方向の道行をいうのだろう。ともに泊瀬の側からいったもので、「行く」というのは、泊瀬から外へ出て行くこと、「通ふ」は外部から泊瀬へ訪れることをいっただろう。妻問いの帰路を行くこととしてよいのではないか。

ほととぎす鳴く五月には ほととぎすが鳴くのを五月とするのは後世では当り前のことになる。次項に引く藤原夫人の歌あたりがその嚆矢といつていいもので、万葉第二期にはすでにできていた。他に同時代のほととぎすの歌として、吉野の弓削皇子に額田王が贈った歌(2・111)もある。

菖蒲草花橘を「菖蒲」は現在のあやめとは異なる。常緑の多年草で剣のような葉に芳香がある。花は黄色の小花で、初夏に咲くが目立たない。葉の芳香を邪気除けにした。「花橘」は橘の花のこと、または花の時期の橘を指している。菖蒲や橘で季節感を表現する歌は第三期以降のものが多く、ここは時代としてやや早い印象があるが、ありえぬことでないこと次項に述べる。

玉に貫きかづらにせむと「玉」は薬玉のこと。端午の節句に邪気除けとして袋に麝香・沈香などを入れて柱につるしたもの。香の強

い植物の葉や花をからげて玉状にしたものも用いたのであろう。菖蒲と橘を玉に作る例は他にも見える(18・四一〇一、19・四二六六など)。ここは「かづらにせむと」とあるので、髪飾りに作ったのをこのように表現したのであろう。この部分、玉にも貫きかづらにもしようと、と二段に取る解釈も可能だが、それは適当でないように思われる。一云の「貫き交へ」は髪飾りを表現するものとしては「玉に貫き」よりも妥当で、それゆえに改められた。五月の季節感を薬玉を以て表現するのは、同時代に、藤原夫人(天武天皇の夫人)の作に「ほととぎすいたくな鳴きそ汝が声を五月の玉にあへ貫くまでに」(8・一四六五)があり、この時代としてもありえたものである。「かづら」は後に出る「かざし」とともに髪飾りの一種。「かづら」は「髪づら」(づらは蔓の意)がつまったもので、頭部に巻きつけたり、環状にして頭上に置いたものであろう。冠に近い。ここは蔓草か糸で菖蒲や橘の花をかがつたもの。菖蒲の長い葉を環にし、それに橘の花枝を差し挿みもしたか。通常は五月の節句に限らず、祭の折などにこれに用いるに相応しい蔓草があり、それのみを頭部に巻きつけたのを「かづら」といい、その種の蔓草の名をも「かづら」と呼んだのであろう。「かづらかげ」(18・四二二〇)「かげ」(13・三三二九)などともいう。なお下の「黄葉を折りかざさむと」の項をも参照のこと。ここは妻の家に通ってきて、妻

とともに五月の季節を楽しもう、というのである。次の九月の行為も同様である。

九月の時雨の時 時雨は秋のものであるが、集中九月にかけていたものに、ここの他「九月の時雨の雨に」(10・二二八〇)「九月の時雨の雨の」(10・二二六三)「九月の時雨の秋は」(13・二二三四)「九月の時雨の降れば」(13・二二二三)の四例(計五例)が見え、他に十月にかけていったものが三例見える。

黄葉を折りかざさむと 紅葉は時雨によって始まるとするのは平安以降の和歌にもしばしば詠まれるものであるが、万葉集の歌に「春日野に時雨降る見ゆ明日よりは黄葉かざさむ高円の山」(8・一五七一)「百船の泊つる対馬の浅茅山時雨の雨にもみたひにけり」(15・三六九七)など、明かな例がいくつも見えている。「折りかざさむと」は、黄色く色づいた木の枝を折って髪に挿すこと。「かざす」は「髪挿す」がまつたもので、花のついた枝を髪に挿す祭式や宴での習俗である。本来は神霊をこれに招き寄せて体に感染させた宗教的ないしは呪術的な行為であろう(前の「かづら」も同様のものか)。「かざし」はその名詞形で、後に「かんざし」ともいわれる。ここは上の「かづら」とともに宴での行為を指したとも、また宴でなくとも季節の到来を祝福し楽しむ行為をさしたともいへべきものである。本来は季節の到来がもたらす神霊の加護、幸いを

身に付着させるものである。ここでは風流化して遊戯的な行為になつてはいるが、なお古義を印象として残して次の歌句に続けていると見える。そのように毎年祝いの行為を重ねながら、幸せな二人の関係を万世に絶やすことなく、といった陰影が潜む。

延ふ葛のいや遠長く 這う葛のようにいよいよ遠く久しく。「延ふ葛の」は枕詞。「遠長く」にかかる。

葛の根のいや遠長に 原文「田葛根乃」は「葛の根の」と訓む。

「田葛葉」(10・二二九五)「真田葛原」(7・一三四六)などの例があり、葛を「田葛」とも表記した。前項の一云の別伝。

万世に絶えじと思ひて 久しく妻との関係を絶やすまいと思つて。文脈的には「思ひて」は、「万世に絶えじと」のみでなく、先の「かづらにせむと」「折りかざさむと」をも一緒に受けていることになるう。

大船の思ひ頼みて 前項の「万世に絶えじと思ひて」の一云別伝で、二人の久しい関係の絶えないことを信頼して。「大船の」は「頼む」の枕詞。同じ句が人麻呂の泣血哀慟歌の第一長歌に見える。そこには「さねかづら 後も逢はむと 大船の 思ひ頼みて」と、現在は人目をしのぶ間柄だが、何時か晴れて逢える日があるうと、それを信頼する意味になつている。ことはやや文脈を異にするが相似たもので、人麻呂の手法と思われる。そして泣血哀慟歌の文脈からす

ると、その信頼が裏切られ、妻は思いがけなく死ぬのであり、これも本来、未永い関係への男の期待を裏切つて妻が死ぬ、という文脈の方が流れとしては無理がない。下の或本の反歌二首も、女の死を詠んでゐる。

君をば明日ゆ外^{よそ}にかも見む 君（石田王）を、明日からはこの世のよその人と見なすのだろうか。「外^{よそ}」はここでは現世のよそ。別世界。無縁の世界。幽界。一云別伝は、君を明日よりは、「外に見える」は相聞において、恋しい相手を遠くから無縁の人として見る無念をいう表現が多い。ここはその挽歌への応用と見てよい。挽歌では死者の埋葬された山や墓所を、今まで「外に見^みていたのに」と詠む例が多く、この例は少ない。

柿本人麻呂の作なりと 人麻呂の作としては五月の季節の詠み方などに年代的にやや異例の感じの残るものであるが、またこの歌には他の人麻呂歌と類同の語句も見えている。伝承上人麻呂に作者を仮託されたものである可能性も否定しきれないが、真正の人麻呂作でないともいえない。人麻呂の夫婦関係に立つて詠まれる挽歌は、明日香皇女挽歌・河島皇子挽歌（歎泊瀬部皇女忍坂部皇子歌）・泣血哀働歌・吉備の津の采女挽歌など、いずれも夫の期待を裏切つて妻が死に、残された夫が嘆く、という形式になつてゐる。ここも、夫が久しい夫婦関係を期待して泊瀬に通い続けたことを詠む文脈

からすると、妻の死を詠む方が穏当な文脈構成になると見られる。人麻呂に本来そういう歌があり、この歌はそれを、石田王の死の状況に合わせて人麻呂自身か他の誰かが改作したと考えることができる。次に続く或本の反歌二首が女の死を詠むものとする方が妥当と思われることも、それに関連する。

或本の反歌 この或本の反歌は右の本文の書法から見ると人麻呂の歌ではないことになる。それならここに取り上げて注を施す必要はないわけだが、関連のあるものと見たい。例えば萬葉考は先の長歌よりこの反歌二首こそ人麻呂の歌らしいと指摘している。これらが人麻呂作であつた可能性もなしとしない。すでに長歌にふれて説いてきたように、長歌の原型が女の死を詠むものであつたとすれば、それにこの二首が組みあわされていた所伝があつてよい。歌句の注においてふれるとおり、この二首は、本来女の死を悼んだものである蓋然性が高い。長歌に改編が加えられて、男の死を詠んだ歌になつたとき、反歌二首を切り捨てる形態が成立し、その新形態の所伝の中に人麻呂作と記すものがあつたと見るのが理解しやすい。もともと長歌・反歌セットで女の死を詠む原型テキストも人麻呂の作であり、それを男の死に際しての歌に改作したのは人麻呂であつたかも知れないし、またこの歌の詠み手山前王であつたかも知れない。原型では実作者人麻呂が陰に隠れていたが、一方に根強い人麻呂作

の伝承が存在して、改作の時に一部テキストに顕在化したのではないかと思われる。なおこの或本は、長歌を男の死の歌とし、反歌も男の死の歌として扱っていることになる。不自然であることは以下に述べるが、あえてそう解せないものでもない。長歌を人麻呂の作と見るには、五月の薬玉を詠む点が人麻呂作歌に例がなく、やや後世である点に難があるかに思われるが、まったくありえぬことではない。巻八夏雑歌には藤原夫人（天武天皇妃五百重娘）の歌「ほととぎす痛くな鳴きそ汝が声を五月の玉にあへ貫くまでに」（8・四六五）が見える。

泊瀬娘子 男が通つていた先の泊瀬に住む妻を指そう。左注によれば紀皇女のごとで、多分石田王の妻であつたらう。しかし下句への続きからすると、その妻を、あたかも泊瀬で神事に関わっている聖処女のように詠んでいる。これは古代において恋の対象の女を表現する時の形式だつたと見られる。うら若い娘子はいつも神とともにあるのである。この後に見える土形娘子（3・四二八題）・出雲娘子（同四二九）・出雲の子ら（四二九・四三〇）、あるいは依羅娘子（二四〇題・二三四題）など、人麻呂との関連の中にでる名前と類似する。人麻呂の歌らしい。

手に纏ける玉は乱れてありと言はずやも 手に纏いた玉は散り乱れていると言わないことか、言うではないか。「手に纏ける玉」を

泊瀬娘子の大切な持物と見れば、夫（石田王）の比喩とも取れ、この一首が男の死を詠む長歌の反歌であることになる。しかし女を象徴する装飾品でもあり、靈魂の比喩でもある玉が乱れ散ることは、その女の命が乱れ散つたことを意味するとみる方が、遙かに妥当性が高いのではないか。さらに「玉梓の妹は玉かもあしひきの清き山辺に詩けば散りぬる」（7・一四一三）のような火葬における散骨の例を考慮に入れると、なおさらその感を深くする。しかしここは散骨の像を重ねてはいるものじかに散骨を詠むのではなく、あくまで死を比喩的に美的に、所持品の玉の緒の途切れと玉の散乱を、女ので姿の喪失として表したものである。「ありと言はずやも」は人麻呂の死を詠む依羅娘子の歌「今日今日と我が待つ君は石川の貝に交じりてありと言はずやも」（2・二二四）に似る。人麻呂関連歌との近さが思われる。

嘆きつつ君が歩くに似る人も逢へや 嘆きつつ歩く君に似る人にも逢おうか、の意にとれば、これも男の死を詠む歌として、長歌の内容に適合し反歌になる。しかしその解は「嘆きつつ」を説明しえない。男の歌と見る注は「妻恋しさに深いため息をつきながら」（全注）、「妻恋しさに思い沈みながら」（釈注）などと口訳しているが、不自然の感を否めない。やはりこれは原則的に女の死を詠むもので、妻を失つた夫が嘆きながら、泊瀬の地に亡き人の面影を求

めてさまよい歩くのである。面影を慕って嘆きながら君は歩くけれど、亡き妻に似る人にも逢えようか、逢えない。人麻呂の軽の妻挽歌の第一長歌（2・207）において、妻の里である軽の道をさまよいつつ、似る人にも出逢えないのと、ここは酷似する。やはり人麻呂の歌との類似性が強い。「似る人も逢へや」は「似る人」を主語とした言い方。似る人が（向うから来て、君に）出逢わないだろうか。相手を主語にとつて言う「逢ふ」は偶然の出逢いを言う。元来超自然的な存在との出逢いをいうものだった（森朝男「逢ふ」『古代和歌と祝祭』一九八八 有精堂出版。ここも死者と出逢うのである。「似る人」は死者の蘇りをいう。古事記上巻、天若日子の葬儀の場面では、友の阿遲志貴高日子根が弔いに訪れて、死者が蘇ったと見誤まれる話がある。源氏物語に藤壺女御や浮舟など、死者に似ている人物が現れて慕われる話の見えるのも、上代のこの観念と一続きのものである。

口訳

同じ石田王の亡くなった時に、山前王が哀傷して作った歌一首
 警余の道を毎朝出て行く人が、（夕方になると）心に思つて通つてきたことは、ほととぎすの鳴く五月には菖蒲や橘の花をくす玉に貫いて（貫き交えて）髪飾りにしようよと、九月の時雨の頃は、紅葉

を折つて髪に挿そうと、這う葛のようにいよいよ長く久しく（葛の根のように永久に）、いつまでも二人の関係が堪えないようにと思つて（二人の関係を信頼して）通つて来たであろう彼の君を、我々は明日からこの世のほかの人と見ることだろうか。（四二三）

右の一首は、或いは柿本朝臣人麻呂の作であるという
 或本の反歌

（解1）泊瀬娘子が手に纏っていた玉のように大切な夫君の王は、玉の緒が切れて散り乱れるように、命あえなくなつてしまつたと、人がいうではないか。

（解2）泊瀬娘子が手に纏っていた玉は、緒が切れて散り乱れているというではないか。そのように娘子の命はあえないものになつてしまつたと人がいうではないか。（四二四）

（解1）河風の寒く吹く泊瀬の（河沿いの）道を、恋のものを思いをしながら行く君に似る人は、これから出逢うだろうか。

（解2）河風の寒く吹く泊瀬の（河沿いの）道を（妻を失つた悲しみ）嘆きながら君が歩いてゆくのに、亡き妻に似る人がやつて来て出逢うことがあるうか。（四二五）

右の二首は、或いは紀皇女が薨去された後に、山前の王が石田王に代つて作つたという

（注記——反歌二首の解1は男の死の挽歌、解2は女の死の挽歌と

見た口説)

補説 人麻呂の歌は現形の奥に古形を層のように内包している。先に猷泊瀬部皇女・忍坂部皇子歌(2・一九四、一九五)についても同様の特質を持つことにふれたが(森『恋と禁忌の古代文芸史』第三章第一六節、他)、ここでも、古層に女の死を詠む挽歌が隠れていると判断される。そうした多層性が人麻呂自身の改作によるものか、それとも伝承上の変化によるものかは、なかなか難しい問題である。さらにこの歌はもともと人麻呂は代作者であるに過ぎないから、形式作者(歌の詠み手、山前王とするのが最も考えやすい)が、公表の時の事情に合わせて改作している可能性もないとはいえぬ。この歌には女の死としては紀皇女の死が想定され、男の死としては石田王の死が想定されるような題詞・左注が随伴している。諸注が、石田王と紀皇女とは夫婦の関係にあり、山前王は二人に親しい人であって、人麻呂の代作した歌を、山前王が自らの歌として、石田王の死の際か、その妻紀皇女の死の際かに贈ったとするのは、考えやすいことである。しかし本来人麻呂は、紀皇女ないしはそれ以外の皇女レベルの女性貴人の死を対象に作ったのではないか。それが人麻呂と親交の深かった忍坂部皇子の息である山前王に、あるいは山前王を介して石田王に献じられたかしたもので、それが後に石田王

の死を詠む挽歌という伝承を派生させたのではないかと思われる。巻二には弓削皇子が紀皇女を思つて詠んだ歌が見える(2・一一九〜一二二)。この時代の皇女の中には、他にも十市皇女・但馬皇女など複数の皇子と恋愛関係を持つたらしい伝承を留める人が多い。紀皇女も同様の傾向を持つた皇女であつたのではないか。人麻呂はそうした宮廷貴人の恋を材料に物語的な恋歌や夫婦愛の歌を詠んでいる。泣血哀慟歌もその類であるが、この歌も、そうした宮廷歌人人麻呂の作歌土壌から生成した歌であると思われる。

(本学教授)